

図書貸出ランキング

昨年度に総合・国際文化学図書館に入った本の中でよく貸し出された本は何でしょうか？

今回は図書館の分類（NDC）で、ジャンルごとのランキングを調査してみました。

※2025年度に入った図書を対象に、2025年4月～2026年3月の貸出回数を集計しています。

※貸出回数には延長を含みます。

※上下巻など複数巻ある本は貸出回数が最も多い1冊のみ掲載しています。

0総記

1位 (11回)

世界の教育はどこへ向かうか：能力・探究・ウェルビーイング / 白井俊著。

2位 (10回)

新編人と人との間：精神病理学的日本論 / 木村敏著。

2位 (10回)

ケアと編集 / 白石正明 [著]。

2位 (10回)

雑誌利用のメディア社会学：文化を可能にする「工夫」 / 永田大輔, 近藤和都編著；松永伸太郎 [ほか] 著。



1哲学・心理・宗教

1位 (13回)

ロバート・キーガンの成人発達理論：なぜ私たちは現代社会で「生きづらさ」を抱えているのか / ロバート・キーガン著；野津智子訳。

1位 (13回)

生きがい形成の心理学 / 熊野道子著。

3位 (12回)

古代 / 細井浩志編。



2026年10月発行

神戸大学附属図書館学生チームULiCS



<https://lib.kobe-u.ac.jp/about/ulics/>

@ULiCS_KobeU_Lib

ULiCS 検索

2歴史・伝記・地理

1位 (21回)

地球の歩き方A18 スイス '26-'27 / 地球の歩き方編集室著作編集

2位 (13回)

グレーバー+ウェングロウ『万物の黎明』を読む：人類史と文明の新たなヴィジョン / 酒井隆史責任編集.

3位 (9回)

革命と親密性：毛沢東時代の「日常政治」 / 鄭浩瀾編著.

3位 (9回)

Youth and revolution in Tunisia / Alcinda Honwana

3社会科学

1位 (28回)

1964年ブラジル・クーデタと民主体制の崩壊：冷戦期ラテンアメリカにおける軍政の誕生 / 橘生子.

2位 (24回)

問題解決の全体観：仕事の質とスピードが飛躍するメカニズム / 中川邦夫著

3位 (17回)

統治機構改革は教育をどう変えたか：現代日本のリスケーリングと教育政策 / 徳久恭子, 砂原庸介, 本多正人編著.

4自然科学

1位 (13回)

超少子・超高齢社会の日本が未来を開く：医療と宗教のパラダイムシフト / 長谷川敏彦, 鎌田東二著.

1位 (13回)

$E=mc^2$ 世界を変えた式：質量はエネルギーそのものだった! / 村山斉監修.

1位 (13回)

数学の現在 = Creating mathematics / 斎藤毅, 河東泰之, 小林俊行編

1位 (13回)

イカの恋、タコの愛 / 佐藤成祥 [著].

1位 (13回)

Neurologic : the brain's hidden rationale behind our irrational behavior / Eliezer J. Sternberg

5技術・工学

1位 (9回)

日清食品をぶつつぶせ：自ら創造し、自ら破壊せよ / 安藤徳隆, 竹居智久 [著].

2位 (7回)

半導体のしくみとビジネスがこれ1冊でしっかりわかる教科書 / 田中瑞穂著.

3位 (6回)

In praise of floods : the untamed river and the life it brings / James C. Scott

6産業

1位 (19回)

新・コンテンツツーリズム論Ⅰ 観光行動篇 人はなぜ物語の地に向かうのか / 清水麻帆著.

2位 (10回)

止まり木としてのゲストハウス：モビリティと時限的つながりの社会学 / 鍋倉咲希著.

2位 (10回)

中国農村曼陀羅：円環する郷土と暮らし / 田原史起 [著].

2位 (10回)

マーケ領域で実践されている生成系AIの技術：Chatbot・RAG・OCR・TTS/TTV-AI関連技術スタックの構成要素を徹底詳解 / 藤田拳著.



7芸術・スポーツ

1位 (10回)

ジゼル：初演から現代まで / 鈴木晶編著.

2位 (9回)

山元恵一展：まなざしのシュルレアリスム：le fragment du rêve：夢のかげら / 岡本由希子編集.

2位 (9回)

ミュシャから少女まんがへ：幻の画家・一条成美と明治のアール・ヌーヴォー / 大塚英志 [著].

2位 (9回)

「ふつうの暮らし」を美学する：家から考える「日常美学」入門 / 青田麻未著.

2位 (9回)

日々賭けをする人々：フィリピン闘鶏と数字くじの意味世界 / 師田史子著.

8言語

1位 (11回)

一度読んだら絶対に忘れない英会話の教科書 / 牧野智一著.

2位 (8回)

ドイツ語練習問題3000題 / 尾崎盛景, 稲田拓共著.

2位 (8回)

IELTS 19 academic with answers : authentic practice tests ; : pbk.

9文学

1位 (12回)

曲亭馬琴の読本の研究 / 洪晟準著.

1位 (12回)

「国語」と出会いなおす / 矢野利裕 [著].

3位 (8回)

不機嫌なメアリー・ポピンズ：イギリス小説と映画から読む「階級」 / 新井潤美著.

3位 (8回)

シーソーモンスター / 伊坂幸太郎.

3位 (8回)

美味しく楽しいフランス文学：文学から考えるフランスの飲食文化 / 福田育弘著.



太宰治『斜陽』新潮文庫、2024年

「斜陽」とは西の空に沈んでいく太陽のことである。転じて権勢が衰え没落することを指す。この小説では、終戦を迎えた日本を舞台に、没落していく貴族の生き様が描かれる。

まず、最も明るく美しい存在として描かれるのが主人公かず子の母だ。彼女はその所作や発言などにも表れるように、貴族的な精神の体現者である。ところがどんなに気高い精神があれども金銭の問題は如何ともしがたく、住み慣れた家を離れることになってしまう。時流に逆らい貴族であり続ける彼女は、美しさを保ったままに衰弱していく。

弟の直治は母とは異なる道を選んだ。学校や軍隊で異なる階級の人間と触れ合うことが多かったからであろうか。彼は民衆に交ろうと、あえて墮落した生活を送る。麻薬に依存し、下品な言葉使いをして、家というものを捨てたように生きようと試みたのだ。しかし当の平民からは彼の態度はすましたように感じられたらしい。どうしても捨てられぬ貴族の精神と、自堕落な生活は、彼が民衆にも貴族にも受け入れられない呪縛となって苦しめた。最終的には彼は貴族であることに殉ずる。

家族の衰滅を見届けたかず子は、「革命」によって古い道徳と戦い生き抜こうとする。一夜の出来事をきっかけに、彼女は小説家の上原に惹かれていくことになる。彼は直治の遊び仲間の小説家で、退廃的な日々明け暮れる男だ。上原には妻子がいるのだが、かず子は彼との間に子をつくることを望む。そうして母と私生児の二人でこの先を生き抜いていくことが「道徳革命の完成」なのだと彼女は言う。

以上の話を踏まえると、作中を通してかず子という女性の特異が強調されているのかのように感じられる。しかし、実際には彼女自身は先に述べた二人と相違ないのではないだろうか。というより、彼女は自分自身の転落をよく理解したからこそ、子を生もうと考えたのだと思う。彼女が恋慕う上原は田舎から上京してきた平民であり、墮落した生活を送りながらもそれを恥じるということが一切ない。それは、かず子たち貴族が美しく、一方で生気のない存在であるのと対照的に生の衝動に満ち満ちている。他の誰でもなく上原との間に子をなしたいと彼女が願うのは、その生き生きとしたものを取り込みたいという想いが背後にあるからではないか。（理学部3年）



太宰治「皮膚と心」『太宰治作品集』岩波書店

江國 香織「災難の顛末」新潮社

人は、小さなきっかけひとつで様変わりしてしまうこともある。急に、自信がなくなる。誰かに冷たくあたってしまう。思いやりを忘れていく。人は、弱い。それでも、美しい。

『皮膚と心』、『災難の顛末』。この二つの短編は不思議なくらい似ている。後に読んだ方では、その途中でこれは以前読んだことがあったのではないかと錯覚してしまったくらいだ。ある女性に、突然皮膚の異変が起こる。はちはちに腫れてしまった身体、醜い赤い斑点。そんな彼女たちと、恋人たちとの物語。

『皮膚と心』の主人公は、不器用で貧相だが心優しい旦那さんと幸せな生活を送っている。けれども28歳にもなってしまった自分をおたふくだ、おばあちゃんだと悲観してしまうような性格だった。ある日突然吹出物に見舞われ、段々と自分を追い詰めていってしまう。

「このまま死なせて下さい。泣いては、いけない。…（中略）…隠してしまおう。あの人は、まだ知らない。見せたくない。もともと醜い私が、こんな腐った肌になってしまって、もうもう私は、取り柄がない。屑だ。はきだめだ。」

結局、旦那さんは彼女を見捨てることなく病院に連れて行ってくれる。すこし良くなった後、ひとこと、「うれしいか？」と尋ねてくれるのだ。

一方『災難の顛末』では、ウイスキーという名の猫を飼っている物書きの女性が主人公である。1年求婚し続けてくれている恋人や、担当の編集者の心配を他所に、彼女は諸悪の根源であるノミの退治に執心してゆく。

「私はゆっくりベッドから降りた。現実のようにリアルな悪夢の次は、悪夢のようにグロテスクな現実だったというわけだ。一体どっちが私の住む場所なのだろう。憎しみだけが音もなく私の体に浸透し、汚らしいノミたちも、平気な顔でノミをばらまくウイスキーも、ちっとも役に立たないノミとり粉もノミとり首輪もシャンプーも、それを売りつけた薬屋の親父も、そしてこういう思いを知らずにのんしゃらんと生きている他のすべての人たちも、みんなみんな憎くて死にそうだ、と思った。みんな憎くて死にそうだ。」

前者とは違い、恋人は彼女を見限って出て行ってしまう。それでももう、彼女は気にしない。「さて、おできたちに薬をつけましょう」。小さな声で、うたうような調子で言う。

結末こそ異なれど、この2人の女性の根本は同じだ。できもの一つで、これまで美しく見えていたはずの何もかもが崩壊し、怒りや憎しみに支配されてしまう。私は、そういった危機にしか現れない、エネルギー的な女性を魅力的だと思う。半狂乱で忘我の中にある女性は、世間一般には醜く映るかもしれない。だがそれが、それこそが人間だ。簡単に、単純で、だからこそ複雑なのだ。彼女たちの見せてくれた片鱗は、そういうことを語っているような、そういう気がした。（文学部1年）